

バレイショ産業の将来に向けて

カルビー(株) 相談役 松尾 雅彦

去る4月19日、帯広畜産大学において、元神戸大学の保坂和良教授が提唱された寄付講座「遺伝資源開発研究所」の開所式が行われました。本研究所は、大学を中核として、農業団体と加工バレイショの異質な2分野（ポテトスナックとポテトサラダ）が共同で研究開発事業支援を行うことになります。最も重要な研究課題は海外から遺伝資源を導入して、育種活動を活性化することです。育種研究の第一人者である保坂教授が十勝に身を投じられ、研究所ができたことに大きな期待をしています。支援サイドとして農業団体だけでなく、消費者とつながっている事業者が関わることはバレイショ産業にとって画期的なことでしょう。

では、本研究所がこうした形で設立された時代要請は何なのでしょう。その応えとして、私のバレイショ産業における現状認識を需要面と生産面から述べます。

需要は1990年代に220万t（原料換算、澱粉除く）程度になり、その後も消費は順調ですが、国内生産量と加工品輸入量のシェアは速いテンポで輸入側が増加しています。1995年の輸入シェアは31%でしたが、13年後の2008年には39%に伸長。生バレイショ重量に換算すれば、24万tの輸入増加です。米国の冷凍加工品のほか、中国のピールポテトの伸びが堅調なことにも注目しな

ければなりません。両国製の加工品は、日本の生食向け生産の低下（約20万t）につながっています。とくに中国産のピールポテトの拡大は、価格競争の激しい外食業でカレーメニューなどが広がり、その需要の増加を支えています。つまり、中国でピールポテトの技術革新が進歩していることなどに危機感を抱き、従来、ポテトスナックなどフライ加工側が要求してきた生産技術革新に、ポテトサラダ業界も研究参画することになったものと推察しています。

現状認識の2つ目は生産面です。とくに10a当り収量の増加に目を向けますと、日本とスコットランドとの比較において、1960年頃日本では1.8t程度のものが1990年頃に3tを超えました。カルビーの北海道内契約栽培では3.5tまで伸長し、その後は伸びが止まっています。一方、スコットランドでは1960年頃2.4tであったものが1990年頃には4tに達して、その後も伸長して現在は4.5t程度になっています。

生産面でも期待される新しい動きがあります。去る2月に帯広において、米国バレイショ研究界の泰斗、ウィスコンシン大学教授のパルタ博士の講演会があり、次の指摘を受けました。「土壌のCa不足では優れた塊茎を作れなくしている」。日本ではCaを入れると「そうか病」になるといわれ、土壌分析でCa不足でも控えてきた経緯が

あります。博士は、炭酸Caではなく水溶性の硝酸Caが塩化Caを使うことを推奨されました。パルタ博士と同様な主張をされているのが農業コンサルタントとして豪州とニュージーランドで活躍されているエリック川辺博士です。年に2回訪日され、約200名の農家を指導されています。私が報告したいのは、その農家グループであるSRUメンバーの谷さんが、「バレイショ栽培研修会（スナックシリアルフーズ協会・北海道馬鈴しょ協議会共催）で発表された内容です。川辺博士の指導の下、土壌のミネラルバランスの改善に努力したところ、10年かけてバランスを適切にするとそうか病がでない圃場になったとのこと。

なぜこのことを取り上げるかといいますと、多くの農家からそうか病耐性品種を期待する声が多いからです。品種開発の体制がいくら整ってきても、成果がでるのは10年後でしょう。更にその品種を消費者が求めるかという事情があります。そこで重要になってくるのが、農家の栽培法です。つまり、谷さんのような現場活動こそが、大きな改善をもたらすことができることを物語っています。3年前に米国コーネル大学を訪ね、1週間滞在しました。そこで学んだ視点はこのことを裏付けてくれました。それは、「栽培面では“プロ農家”が先生で、大学の先生は彼らの知識欲を満足させ、観察を通じて自然界の掟を見出すお手伝いができるだけ」との考え方でした。

2007年に再開された「ポテトフォーラム」における私の提案は、「高等研究機関を核としたポテトクラスターをつくろう」でした。バレイショ遺伝資源導入の研究所が開設されたことは前述のとおりです。土壌の

改良についても帯広畜産大学で民間会社との共同研究も始まりました。次は加工メーカーの出番です。前述のパルタ教授に米国でCaが問題になったのはいつ頃かと質問しますと、欧米では土壌にCaは豊富に含まれており、その植物に対する効能はあまり研究されていないとの答えでした。

一方、日本の土壌にはCaが不足しています。その話をカルビーの創業者松尾孝は80年前に、栄養学者から聴き知りました。その摂取に努力しなければ強い骨格ができない。それでは体格面で欧米に勝てない、と。また、白米は胚芽に含まれるビタミンB1を棄てていることも知りました。彼はCaとビタミンB1を多く含む製品「カルビー」を発売したのです。売れたかどうかは聞いていません。Ca不足の塊茎では優れたポテト加工品はできません。今回新たに発足した遺伝資源開発研究所にポテトサラダメーカー2社が参加していることは大変意義あることです。ポテトサラダでもCaの効果を期待しているはずだからです。

今後、バレイショ加工向けの品種開発と土壌改良が進展すれば需要が活性化するに違いありません。現状は米国と中国との加工品の挟み撃ちにあっています。その結果、加工メーカーとして何をすべきかの視界は開けてきました。

メーカーが消費者を開拓し、需要を創造しなければ農家の努力がしぼんでしまいます。品質改善で農家を叱咤するより、メーカーが競争力のある製品開発で成功することこそ農家の励みになります。そんな思いを深くしながら、現役を退任したにもかかわらず北海道各地を行き来しています。